

二月作品

月集スバル



☆今月の四人☆

断捨離の寄付

宮里 信輝 神奈川

断捨離で貰ひしジョニー・ウォーカーは「1820」畏みて飲む
今月の神奈川歌会の賞品は断捨離寄付の「柎二」の色紙
来月も神奈川歌会の賞品は断捨離寄付の「英子」の色紙

〔長男が七十二歳で永眠し〕年始の賀状失礼します〕
内臓でなくてよかつた右腕の治らぬ「できもの」皮膚癌だとは

家族度

木 畑 紀 子 京 都

わが知らぬ生の真中の子の家族おもひ聴きをり夜半のこほろぎ
あふたびに息子一家の家族度が増してゐるなり〔妹のちから〕ぞ

注文はブラックのみでランドセル売り場に六歳興味のあらず
六歳の子どもに「義務」がのしかかる来む春すこし憂ひをふむ
ちやん付けで名前よびあふ四十代息子夫婦を羨まねど良し

僧位と寺格

橘 芳 園 新 潟

肩書は非僧非俗のみ親鸞は市井で和讃を詠み続けたり
信仰にあらざ師として親鸞を学ぶと言へり山折哲雄氏

親鸞に背く宗門十三級の僧位十四等級の寺格を定む

「真純は単純をもとむ」と魯迅言へど教学の書は晦澁を欲る
老人のたむろする見れば親鸞をつたなく説きし日々の思ほゆ

えんぶだごん

水 上 比呂美 東 京

はちみつは蜂の唾液の味するとおとうと言ひき遠き秋の日
はちみつに砂糖には無き濃りがはしと有るは何ゆゑ夕あかね雲
はちみつと密航蟻はコンテナにひしめき合ひて海を渡り来
字の中に虫のひそめる怪しさよ蠢動、蠱惑、蠟、蜜楼
朝焼けのキッチンの棚のはちみつ瓶閣浮檀金の溶けるることし

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

乾く音をりをり立ちぬ季はやき樫の落ち実を夕べ踏みゆく
道ぎはに掃き寄せられし団栗のひとつひとつが淡き艶保つ
初冬の大きを浴みてことさらに黄の色冴えつ鉢の小菊は
照り翳りさだめなき日を地に列びピオラの類ひ花の露けし
老い耄くるわたしに向かひ眼鏡店補聴器店の人らやさしき

杜沢 光一郎 埼玉

歴史的根柢ありとはいふなれど春の季語にまじれる「踏み絵」かなし
トイレにしゃがみながら思ひ出し笑ひも時にする老いはれわれをお許しあれな
何を思ひ出して思ひ出し笑ひせしわれかわからなくなつてまた一人笑ふ
葡萄にはやつぱり種子のあつたはうがブドウらしくていいなと思ふ
種子なし葡萄や西瓜つくりたる報いにヤタネなし人間殖えあるといふ

武田 弘之 神奈川

禁煙はむづかし一刻一晷の主なればと僧の君言ふ
瑞泉寺和尚が語る方代の歌おもしろくやがて哀しも
僧侶にて歌を楽しく詠みたまふ良寛さんも一真さんも
清僧と己を詠めり百本の卒塔婆書き終へ一真さんは
瑞泉寺石庭に見つ大いなる洞穿たれしその寂寞を

高野 公彦 千葉
はるばると生きて来たりて今があり朝光に切る足の巻爪
〈結婚〉の前に〈血痕〉の項ありて広辞苑とところ物騒
歌の中に古語のかがやくさまに似つ入日が照らす三日月の鋭刃
冬の夜にんにくといふにくを焼きぬる爛飲んでほくほくとある
敗北の北は逃げるの意といへど白鳥北帰行の美し
仲 宗角 三重

この家の者がむかごをどつととり後はけものものとするにまかせる
捨てきたる尻がる女ちらちらと寒禽のごとつききて逝きたり
ポール・オースターの『冬の日記』しみじみと一日読むなり山小屋にゐて
『冬の日記』がらしの日に読みゆけばこれまでにしなとかの母ささやく
寒き街帰りきたれば餌をまつメジロすりよること庭木々

奥村 晃 作* 東京

時にわれも湯浴みせし街の銭湯が無くなつたと妻が箸置き呟く
十五日間勝ちつ放しの時代は過ぎ三敗はまだ優勝圏内
朝四粒葉呑むのが習慣で死ぬまで取り付け飲まねばならぬ
八十を越えて葉を一粒も吞まで過せる人は居るまい
九十の神山信子の詠草に学友すべて〈鬼籍〉と歌う

森重 香代子 山口

夫亡きのち一人棲む身を勤き人と小声に今日は囁かれたり
退らむと黒御影石胸に抱き秋の日差しを烈しさを
仏飯を禽にふるまひ庭の草にさんばん抜き鍵閉めこもる
照り翳りはげしき日にて卓上の瓶に生けたる花の明暗
いさぎよく睡魔に負けて書を閉づる机にせんだんの円ら実緑し



桑原正紀 東京

空港の人混みを逸れ片隅で歌作りをりこは日野山
方丈の庵ならねど瞑目をして入りゆけり歌工房へ

歌よむはまことはかなきことなれど手離しがたしこのはかなごと
おもひきり声張り上げてお終ひに「チクシヨウ」とか言ふオヤジのくしやみ
真夜中にオヤジのくしやみひとつとして迫りきたれる魑魅蹴散らす

狩野一男 東京

日影 康子 富山

土蔵うらの大樹ひひらぎの花しろく散れば偲ばる宮柵二先生
唐突にしじまをよぎるモズの声いまだ稚し秋深みつつ
清らかに寺のうちそと整ひて報恩講の秋のそら澄む

悲とふ字の非はひき裂くの意と知りてふり返る辛き別離の幾つ
精いつばい今日を生きれば明日へと繋がる思ひに孤独をしのぐ

古屋祥子 群馬

休耕に荒れ放題の田を見兼ねボランティア団体がコスモス咲かず
コスモスの花咲き盛る一反歩、風の通路は空へつながら

金木犀、山茶花も刈り込める生垣の延々と続けり野田宿街道
ぶだう畑、ぶだう即売、ワイナリー、葡萄人生が高地に根付く
タッチ、アンヨ、稚児の進歩の過程とは逆に高齢者の機能減りゆく

影山一男 千葉

みどりこの顔ほどの柿とうとろり、とろとろり喉くだりゆく
寒い寒い十一月の雨止みて心研げよと涼のこゑ聴く

香港の学生たちの笑みおもふ中国返還まへの秋の日
ささやかな抵抗としてデモしにき70年の十八歳は

こゑあげてうねりとなりてゆく水の今なし令和の学生諸君

岡崎康行 新潟

台風の近づく夜の静けさを鳴きぬしこほろぎいまはとだえぬ
洪水の路地の車よ外からも中からも水に捕らへられて
つきあひのはさみ将棋に興じるつ勝つよろこびを知る二歳子と
一分の黙禱といふ闇に立ちげんじつのゆびにささへられたり
カテーテル処置のため巨大病院の立てば開きたる入口をゆく

小島ゆかり 東京

沖島は琵琶湖にかぶ歌枕 島びとよりも島ねこ多し
沖島へ漁船は奔る定期便に乗り遅れたるわたしを乗せて
十月の水照りざんざん押し分くる漁協組合長シゲルさんの船
島びとの集ふ広場に万葉の歌碑あり若き人麻呂のうた
恋に悩む人麻呂もこの闇を見しか淡海のうみの黒漆の夜

島田 暉 神奈川

口喧嘩してから妻と話せず愛といふ字が色濃く書けぬ
旅をする背中合はせの同行者ある時は猫あるときは鬼
吾妻との会話途切れて薫る闇虫の合唱高鳴りてくる
雨粒に濡れたくらゐで溶けぬ妻持ち傘秘めてカルチャーに出づ
言葉ではなくて笑顔で返事され散歩の行先薔薇色になる

大松 達 知 * 東京

やや早い死と言われたりそのやや、はどこからきたかどこへゆくのか
ゆくあきの深まりはさて、一本のサランラップが書斎を救う
判定があれば負けない自信あれど、負けてやること、負けは負けなこと
四文屋の豚タン食ったあの日から豚タン食うとなぜか死を思う
多面指ししている棋士のまなざしでタン一本を差し出され、乙

田宮 朋子 新潟

五百ほど実をつけてゐるへ八珍柿(はちんがき)百まり挽ぎて干柿にせり
胡麻おほき甘柿なりき四十年前に伐られし(霜降)を恋ふ
信濃路の鬼無里(きみなさ)の村の日暮れどき道問ひがてら(筆柿)買ひき
いまだ見ぬ(会津身知らず)県境の山のかなたに柿熟れをらむ
蜻蛉とび紅葉ちらちら散る庭で食べる分だけ(富有柿)採る

津金 規雄 神奈川

(幻)と冠付けて展示さる「築地明石町」四十余年経て
搔き合はす袖につつめる身は細し清方描く素足の夫人
洋館の垣根に咲ける朝顔の半ばは枯れて海風に鳴る
ついと逸らす視線は秋の冷ややかさ画幅の外の何を見つむる
三幅の軸に描かれ夫人、芸者、そして娘の媚態三様

小山 富紀子 京都

通る度吠えられぬしがこの秋はただただ眠る犬となりたり
ふは不和とのれん揺れをり兄弟の暖簾争ひ終はらぬ老舗
来年も咲けたらええなあこの場所に桜紅葉が葉を落としゆく
雨だれが行進の音となりてゆく今日も供華無き英霊の廟
また少し奥へ押しやる亡き母の服の入りたるダンボール箱

清水 正子 神奈川

汲みおきの水すこしづつ使ひをり野分すぎたる朝影のなか
水仕とはかく慎ましくするものか江戸の長屋の暮らしのやうに
R氏の歌集ひもときプラトンの風につまづく浅学われは
プラトンのイデアはさあれ引き明けを風鐸鳴れり密教聖地
飛花のごとラディッシュ散らす密教の風のかたちのサラダボールに

小嶋 一郎 佐賀

舗装路の沿ひの黒土持ち上げて霜柱立つ踏めとごとくに
草生にて立ち上がるときめくるめき思はず掴む萱の穂先を
幸せの網のやうにも日は注ぐ師走と言へどかくあたたかく
にんげんは目覚ますために眠るのかその逆なのか寝しなに思ふ
何ゆゑに怒りてゐるか見よがしにシンクを磨く妻のうしろ姿





後藤 美子 北海道

テロップが大相撲中継の中を流る「日本海側に暴風雪警報」
雪嵐がうがうと夜を過ぎゆけり山側の窓凍てて開かず
新雪にいちめん緑き葉を散らし並木の公孫樹あらかた裸
どんぶりの即席煮麵湯気を立てストーブあたたかし吹雪に籠る
暑かりし夏のゆゑにか山茶花がだまつて開く二月早く

福 士 り か 青 森

昼月の寒さにも似る今日ひと日まちがひ電話に一度出たのみ
消え残るただそれだけでうつむいてゐるやうに見ゆ朝の街灯
美しく編隊を組む白鳥の黒ければいかに怖ろしからむ

白鳥のやうに編隊組みながらドローンは飛べり二〇一九

ドローンを見て歓声をあげる子らゆめ脅声となることなかれ

藤 野 早 苗 福 岡

てつぺんを時計の針が過ぎしころ糖質爆弾胃の腑に落とす
まなぶたにアイライン引き忘れたり画竜点睛欠く秋ひと日
後ろ手に背中のお太鼓ぼんと打ちモビルスーツの装着完了

世紀末バリを飛ばしか公望とジュディット・ゴティエの『蜻蛉集』は
幻想派美女の体とは限りなり femme fatale は市井に紛る

風 間 博 夫 千 葉

江戸後期「文化文政時代」ありて写楽、北斎の浮世絵流行る
駅通路おのづ流れの生まれれば遅れぬやうにうしろ着きゆく
ローカル線流鉄流山線は単線、二面連結がゆく

衣食足りてゐるはずなのに礼節を知る人ばかりと言へぬ国会
(衣)ありあれど衣服にあらぬもの母衣、衣被、胞衣、衣粥

田 中 愛 子 埼 玉

コーヒーの香りを褒めてたらちねは飲まず臥しをり午後の施設に
部屋出づるわれの気配に目覚めたり雨音のなか眠れる母が
血の色の雁来紅はや きやうだいの間に生れたる厩戸皇子
泥つきの大根うれしその泥を水で流してほそくきざみぬ
しをりひもゆつくり下ろし枕頭のあかり落とせば晩秋の闇

鈴 木 竹 志 愛 知

水鳥が笑顔を寄せて晩秋の川の面を遊覧しをり
水鳥の心根などにこの秋は思ひを寄せて岸边に飽きず
川中の一個の石に寄り来たる亀を数へて十指に近し

晩秋のホームにさざめく生徒らの多くはいまだ学らんを着ず
「学らん」の「らん」は何かと気になりて夜半の書齋に解決を見る

原 賀 櫻 子 東 京

ひとつ事だけを考へあるるとき晴天の日も蝙蝠傘を差す
判断をせまらるるらく呼び出だすわれを別名、神といふかも
グーグルで買ひし雑誌を読みさしてアンドロイドのやうに居眠る

霧の別れ、雨のなぐり込み、雪の喪のやくざ映画よ健さんの意気
萱堂の漢語より顕つ姿ならさうだな授業参観の母

水上 芙季 東京

哀しみは万有引力より強く抗ふやうに行く西へ西へ
一人眠り、一人起き、一人過ぐすわれ(日にち薬)を心に置きて
競馬場の芝の光とをぢさんの喧騒のなか(今)だけ思ふ

この街はジム行くわれしか知らぬゆゑ一人で存分歩き回れり
行つたことない場所行つて食べたことないもの食べて広がれわたし

大野 英子 福岡

母とふたり愛でし公孫樹が伐られるてまたひとつ増ゆわが欠落感
はらほると黄葉が秋の陽のなかに散るさま母と飽かずながめき
袖口の赤い刺繡をかはいいと母に言はれてから赤が好き

おかあさんくすぐつたいよ編みくれしモヘアのマフラー巻いてもひとり
思ひ出は忘れたころにやつてくる楽しくてしんと襲ふさびしさ

松尾 祥子 東京

来るたびにお鈴を鳴らす一歳に今日も喚ばるるこの家の霊
乳呑み児の泊まりし部屋に晩秋の風ふき入りてガラガラ、のこる
人の世に生きるは難し樹の瘤をさすりつつその木陰に憩ふ
人の世に生きるは哀し手と手と手つなぎていつかその手を離す
予期不安かかへて今を楽しめぬ愚かなる身を電車が運ぶ



桑原正紀歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

秋夜吟 コスモス叢書第1166篇 青磁社

著者住所 〒173-0037 東京都板橋区小茂根三一九一八一〇六

木畑紀子歌集 令和元年7月刊 一七〇〇円(税別) 送料三〇〇円

かなかなしぐれ コスモス叢書第1157篇 現代短歌社

著者住所 〒610-0357 京都府京田辺市山手東一一二二二〇

大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三一六―三〇二

島田 暉歌集 令和元年9月刊 一六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

記憶の炎 コスモス叢書第1162篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市中区瀬谷区本郷一一一四一六